

## ㉑ 山のテング、里のテング

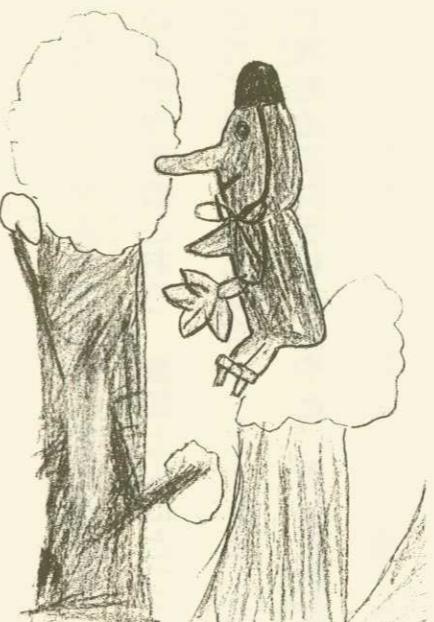
河和田でテングが住んでるのは、奥山のいかい木のあるといやじ。

福井の西別院が、お寺をたてるにで、寺中の善兵衛どんの山の木を買いにきた。なんせ古い庄屋さんの山やから、木もりっぽなもんや。木こりが山ん中に小屋をたてて、そこに寝とまりしながら木をきる事になった。

でもの、いはテングのすみかやつた。自分の家をいわされるんと同じで、反げきに出た。夜になると、テングが大ぜじやわいで、木こりを寝られんようにしたんやと。

これにはホトホト困つてしまひの、憶念寺の年よりのじえんさんに相談した。

どれどれと腰をあげたじえんさん、木こりといつしょに山に泊つたりの、じえんさんにつらつら



仏さまのおかげやろか、ほの時だけはテングも静かにしてたつて。

小坂のテングは、木を切る音を出して、おどかしたんや。

昔は、村はずれの山の端は家なんて一軒もなかつた。日がくれて、山仕事のおっさんが山の端におりてきた。ほしたり、とちゅうでカーン、カーン、斧で木の根っこをたたいて、ほれからのこぎりで木を「コシコシ」切る音がして、日の前にドサッと木がたおれてきて通れんようになつてしまつた。

おっさん、まつ青になつて、木の枝がきわけてすつとんど帰つた。ほやけど、ね床ん中によつ考へたり、あんなとこにほんないかい木はなかつたはずや。

夜が明けて見に行つたら、木の葉一枚落ちてなんだと。

こんどは六十年前のこと。戦争にまけて食べるものも不足してたんで、友達が山の木をきつて段々畑を作つた。

仕事に夢中になつて口がくれてしもた。

そしたら人間の何十倍もの声で、

「早う帰れ」、「早う帰れ」と一回どなつた。

じじと むちゅう  
仕事に夢中になつて口がくれてしもた。

そしたら人間の何十倍もの声で、

「早う帰れ」、「早う帰れ」と一回どなつた。

これもその頃のこと。謡がはやつて、法事や結婚式は

もちろん、仕事しながらでもうとうたもんだ。

ただ山に入つたら、「鞍馬天狗」だけはうたうなと言わ

れてきた。

でもふつと口ずさんでしもたとき、掛けっぷちを五、六メートルもある岩がころがり落ちていつた。

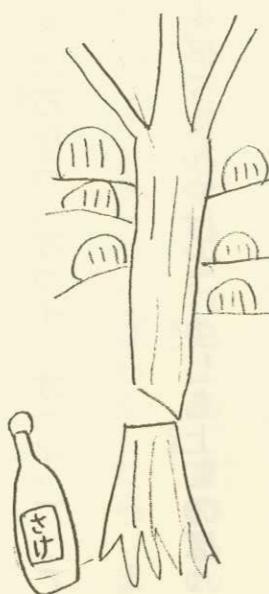
きっとテングがおこつて、岩をおとしたんやろ。



あとの二つも五、六十年前の山ん中のできだと、うれではないよ。

寺中のきこりで、今生きていたら百才になる山本さんが、周り一メートルもある松の木を切りに行つた。大きいのこぎりで一日がかりで切つて、さて倒そうと、かしの木のくさびを打つたけど、どうしても松の木は倒れん。松にはテングがすんでいると聞いていたんで、そのまままにして帰つた。

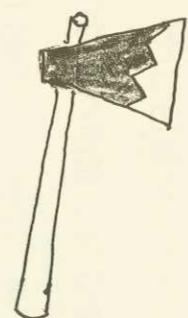
次日のひ、御神酒一升もつて山に行き、松の木にかけて、「どうぞ横の大きい松にお移りください。」といつと、松はかんたんに倒れたと。



与市さんが西袋の山で大杉の枝打ちをしてたら、手まさかりの刃だけ下に落ちてしまつた。手にのこつた柄を下に落としてから、木をおりてさがしたが、柄も刃もいくらさがしても見つからん。これはテングのしわざとしか思えん。テングは女人人がこわいといつての、七つの娘をつれて、

もつじつペニサガしに行つたけど、見つかりなんだ。

そのあと、何べんもさがしたけど、やっぱり見つからんだと。



別司の向い山（八幡山）には、たいこをたたくテングさんができるんだよ。おばはん三入つれだつて、わらび取りに行つたりの、下の方から「オウイ、オウイ。」って呼ぶ声がする。てっきり仲間や思つて、

「早うあがつといで、いつしょに一服しようわ。」といふばつたんやけど、少しも上にのぼつて来ん。

「オウイ、ワッハッハッハ。」と笑うばかりや。

「じりやテングさんが出たんや。」もつおれひして、下にもおりうれん。横の方へにげたんやと。

これは昭和も中じりのお話や。

テングは里にもおりてきた。

テングが家に入ると、その家は栄えるし、人間につけと知恵をもつてゐるやと。

ほんでも運がわるいと知恵とられてしまつともあるひじいんや。

北中の善右衛門さんは、テングが入つてから急に運がよくなつたんやと。

ソトに子守りに来た娘には、テングがとりついていたらしご。テングはいつも家ん中に小石をまいたんにやといの。誰もなあもせんのに、急につしから板の間に小石がポトンと落ちてくる。あれつと板の間の方をみてると、台所の方でポトン。家じゅうさがしてもだれもえん。家のもんはびっくりしても、夜も寝んと番をした。ほしたら電気がふつと消えて、しばらくしたら、また明るくなつた。

ほしたらの、こたつで寝てたゞもの顔にそりや立派なひげがかいてあつたといの。みんなはなんとも気味わるうて、頭からふとんをすっぽりかぶつてねたんやと。

これは昭和二十六年の冬のことやで。落ちてきた小石は、箱に入れて、いまも善右衛門さんに大事にしまつてあるとか。